

永井荷風の読書遍歴

—— 書誌学的研究 ——

赤瀬 雅子

志保田 務

荒竹出版

著 者 略 歴

赤瀬 雅子（あかせ・まさこ）

早稲田大学大学院で近代日本文学を専攻。パリ大学文学部で比較文学を専攻。現在、桃山学院大学文学部教授。著書に『永井荷風とフランス文学』（荒竹出版）、『永井荷風—比較文学的研究』（荒竹出版）他がある。日本比較文学会、日本フランス語フランス文学会、日本近代文学会、日本ペンクラブに所属。

志保田 務（しほた・つとむ）

図書館情報学（書誌情報論）専攻。桃山学院大学社会学部教授を経て、現在、同大学文学部教授。著書に『資料組織法』（共著、第一法規）、『NDC変換便覧』（共編、日外アソシエーツ）、『戦後英米作家研究書誌』（共著、日外アソシエーツ）他がある。

© Masako Akase, Tsutomu Shihota 1990

永井荷風の読書遍歴——書誌学的研究		平成二年二月十日	印 刷	著 者	赤瀬 雅子	発行者	志保田 務	印刷所	荒竹 勉	製本所	江戸川印刷所	発行所	荒竹出版株式会社
		平成二年二月二十日	初版発行										
(乱丁、落丁本はお取替えいたします)		電話 東京 二六二一〇二〇二											
		振替口座 東京 (二) 一六七七八七											

ISBN 4-87043-070-3 C3091 Printed in Japan

まえがき

荷風研究は、第二次大戦以後、質量とも相当に積まれてきました。近代日本文学の分野で、また比較文学の世界において、荷風はメジャーな研究課題の域にあると言えます。さらに近年では、文明批評家として荷風を取り上げ検討する営為も見逃しえないところとなっています。例えば、戦中「非国民」と罵られ、戦後は逆に反戦者と奉られた荷風自身「これでも戦争に一役買っているんですよ」と語った、という記事。これは、諸々の次元で面白さが追究される種のひとつ、と言えましょう。

多方面で扱われる荷風という存在。そうした荷風研究の共通項、知的土壌とでも言うべきところに光を当て、堆積を一杯に透視することもまた興味深いことです。一言で言えば、書誌的研究の志向です。それは上にたどった荷風研究の歩みのクロノロジーにそった、自然の逢着と言えましょう。なぜなら、私どもが本文で述べるように、荷風こそは西洋流の書誌的研究導入の必要を、文壇に示した最初の文人と見られるからです。この点は、また、荷風の書誌的研究をする者にとって、奇しき魅力ともなりましょう。

こうした基盤的研究としてまず挙げなければならないのは＜研究文献書誌＞の編集です。ただしこの方面では、富田仁教授による集成等がすでにものされており、屋上屋を重ねる愚は私どもとても避けるところです。

作家を対象とする書誌的研究の、もうひとつ別の領域として＜読書書誌＞分野があります。

作家は優れた書き手であることに相違ありませんが、実はそれ以上に優れた読み手（読書家）であるようです。彼らの読書対象は、おおむね、時間、空間、ジャンルのすべてにおいて広い振幅を示しています。こうした作家の読書記録が作家研究・作品研究のために有用であることは言うまでもありません。ことに比較文学では相当に重要なテコとなるに違いありません。しかしそればかりではありません。明治、大正期においては気鋭の作家の読書タイトルは、それぞれの時代における外国作品の日本への到来・受容等を証拠づけるものであると考えられます。

本書はこの読書書誌のひとつですが、各章冒頭のわずかの＜まえがき＞的文章と注を除けば、没理的と自覚するまでに地味な、素材列記に終始するものです。

構成具合いのスケッチは次のとおりです。

荷風の全集（岩波書店、1962—74年）全29冊をとおして、日記、随筆、評論、手紙など小説以外の著述を悉皆的に洗い彼の読書物を拾いあげる……。年月順に列記したうえ最低限の注をほどこし、最後に読書作品の著者、タイトルを索引としてまとめています。

ところで、この方面のプライオリティとして、高橋俊夫教授の「荷風日記読書記事索引」（『清和女子短期大学紀要』所載、昭和62年12月1日～、継続中）を明記しておかなければなりません。教授の労作はその依拠した荷風の著作が日記に限られてはいるものの、地の文章が豊かで、「索引」というより解題書誌に該当する豊満さを盛っています。大作と見てとれ、完結まで相当の時日を要することが、その年1回の刊行頻度からうかがえます。

当方（拙著）は至極単純な読書書誌（書目）であり、荷風の読書物そのものをして語らしめ、これを目にする人自身が、無機的な記述に抛って翔び立ち、荷風と彼の作品、時代等に連想を致すことで、有機的に醸成をなすことを願ったものです。

極力注意したつもりですが、こまかな仕事であり、大小の漏れ・誤りがあるかと思ひます。ご叱責を仰ぎたく念じています。

本書は、荷風にいささか執着しつづける比較文学の赤瀬雅子と、書誌情報研究をフィールドとする志保田務の共業です。ただし元をたどれば、両者の属する桃山学院大学が、学際的研究を主眼に設けた共同研究プロジェクトのひとつ「大正作家の書誌的研究」での研究がその鑄型です（桃山学院大学「総合研究所報」Vol. 12, No. 3=1987. 3〜参照）。それゆえ、プロジェクトでメンバーシップを共にした英文学者・中村祥子教授の有益な示唆を多々受けています。また実作業では、下記の方々（すべて図書館司書）の献身的なご協力にあずかりました。

- <記事採録> 山田 伸枝氏（大阪樟蔭女子大学）
深本 悦子氏（元・帝塚山学院大学）
大村 由美氏（同上）
<索引作成> 向畑 久仁氏（姫路獨協大学）
<校正> 山野美賛子氏（大阪府立大学）
三浦 整氏（大阪女子大学）

本書刊行上、好運にも桃山学院大学出版助成金を与えられました。この件では、桃山学院大学合同教授会（1988年度）、同総合研究所の伊代田光彦所長（当時）、並川宏彦現所長、出版担当・林宏作運営委員、渉外担当・阪田栄伸運営委員のご高配を拝しました。

以上の方々に深甚のお礼を申し上げます。また、荒竹出版の荒竹三郎会長、松原正明編集長は、こうした地味な出版を引き受け、印刷組版上専門的な助言をして下さいました。校正では、荒竹出版編集部星野邦子氏に大変お世話になりました。

ここにお名前を記しえなかった方々を含めて、関係各位に感謝致します。

1989年 12 月 1 日

赤瀬 雅子
志保田 務

目 次

まえがき	iii
序 論	3
第1章 明治期—あくなき好奇心—	9
第2章 大正の初め—魅惑の時代の入口で—	21
第3章 大正7年前後—充実の時期を迎えて—	33
第4章 大正から昭和へ—師と祖父への傾斜—	53
第5章 昭和6年前後—文学とは何か—	77
第6章 昭和10年前後—一九とモリエール—	99
第7章 昭和16年前後—戦火を逃れて—	121
第8章 昭和20年代—復活—	143
第9章 昭和30年代—栄誉と死と—	157
永井荷風著作リスト	161
索引	165

永井荷風の読書遍歴

—書誌学的研究—

序 論

1 作家研究法の進展—印象批評から書誌的研究へ

近代文学に関する評論は、戦後になってようやくにその基盤が確立した。それは明治、大正及び昭和戦前の文学を、やや性急な形ながらも文学的に位置づけ、今後の追究の方向を模索しようとする切実な願望に裏打ちされていた。例えばそこにおける「近代文学」の同人の活躍はそうしたことの証拠と言えよう。

しかしながらこれらのうちの少なからぬ論稿は、印象批評・文壇交遊地図的なものである。つまり作家の文壇登場前後までと晩年に力点がおかれることが多く、それぞれの作家が創作の基盤を設定し最も重要と解される壮年期前半に関する記述に欠落を覚えさせられるのである。こうしたことの小さな証左は、例えば下記のようなところにも見ることができる。

「日本近代文学大事典」(講談社、1977—78、全6巻)を開くと、個々の作家の項目において、その生い立ちから作家として世に認められるまでのことがらと、晩年の仕事を論ずる部分に非常にこまやかな筆遣いが認められるのである。このような行きかたが平均的な叙述方法となっていたと言えよう。

さて、評論活動に次いで研究活動も盛んになった。しかし昭和40年代までは、学際的な研究の必要が一般的にはそれほどには必要視されず、作家の一面のみが取り上げられた。作家自身の関心は広がりを持っているにもかかわらず、研究にあたってはその広がりが否定されてきた。思えばこれは奇異なことである。その後、学際的な研究にも視点がおかれるようになり、そのための必要から書誌学的研究が次第に台頭してきた。ただしそれは文献的書誌、年表・年譜の限りにおけるものである。

2 作家における他者の受容—読書家としての作家

ところで、作家の真実の姿は非常に立体的である。評価の高い作家には求道者の雰囲気がある。彼等はまた求道者であると同時に絶えず好奇心を抱いて新しいものを求める。それゆえ彼等の多くは、いわば縦の関係にある文学史に関心が深く、古典の愛好者である。そして更にその関心は横へ向けられ、仲間、文壇に対する興味を抱く。これは当然のことであるが、さらにその時代の外国文学にまで目を注ぐ。そうした営みの基本となるものは膨大な量の読書である。作家は偉大な読書人でもあった。彼等は外国文学、とくに西洋文学の移入に関する最大の担い手でもある。

3 大正期作家における他者受容—その一形態としての読書行動

明治の西洋型の高等教育をうけ、大正期に壮年期を過ごした知識人はほぼ上記のよう

な読書態度を示したと考えられる。明治期政治小説の最大の研究者である柳田泉が、晩年、目が疲れるので昼は英書を夜は漢籍を読み、その合間に和書を見ると述べているのがその典型である。

このような過去の所産への遡及や外国文学の移入は殊に顕著に行なわれてきた。これに一段とはずみがついたのが大正期である。大正期はそれが短い期間であったために、作家達はかえって明治期とは異なる新しさを際立たせている。大正期のほぼ全体を時代の先頭に立って進んだ作家は、古典と西洋文学という縦横の太い線上に作家的資質をクロスさせ、その地点から自らの創作を膨らませる。

4 読書家、荷風

このクロスを判然と持つ作家として永井荷風が考えられる。永井荷風は「断腸亭日乗」を中心とする日誌自体の文学的価値がつとに認められている作家である。大正期に30代、40代という最盛期の大半を過ごした作家である。無論昭和期を大戦後まで生きぬき著作活動を続けた彼を、大正期の作家と限定することはできない。しかしその基本は大正時代における蓄積に負うていると言えよう。例えば第二次世界大戦の間じゅう、荷風自身によれば、戦火に追われ転々とする「老残の身」でありながら、若いときに親しんだフランスの文学作品を繰り返し読んでいた。このことから荷風の作家的基盤が大正期におかれていると言うことができよう。

5 荷風の読書遍歴書誌の作成

既に手の内はお分かりいただいていると思われるが、私どもは、荷風の読書遍歴を洗い、彼における古典的教養、西洋文学の渉猟についてのデータを得る試みをここに展開する。彼が日々、時代時代に興味を持ち、読書した著作を書誌的に整理することで、その内面・作風の形成や、著作との関連をたずねるための基礎を求める。この仕事は、当時どのような文芸思潮がもてはやされ、どのような外国文学が移入されていたかを知るよすがとしたい。

方法的には、彼の日記、書簡、随筆等をとおして、その読書物を記録する。おことわりしておくが、私どもは、作家の日記、書簡などから読書歴を簡単に探りうるものと思っているわけではない。作家の日記などはうそのかたまりだと極言する人もある。私どもも、彼の記述のすべてが真実であるとは信じてはいない。そればかりか、通読したのか否かということについては、確認のしようのない場合が多い。また、そのタイトル名が記されている日誌の年月日とその読書の時期が一致していないことも少なくないであろう。そうしたことがあることは事実である。そうした認識は私どもも持ってはいる。

しかし上記のようなケースにあっても、作家がその著作について認識と関心を抱いていたことには違いがない。こうしたことから、この作業においては、すべて記録にあたいするものとして採録した。

この書誌は、これを見る方々が、それぞれに重視しておられる、幾人かの大正期を中心に活躍した作家を加えて考えて下されば、陰影を持つものとなり、大正文学の全体像、大正作家の特質を浮き彫りにすることができるであろう。

永井荷風の読書遍歴本表

凡 例

I 採録典拠

採録の典拠は「荷風全集」(岩波書店)本篇28巻(1962—65年)である。なおこの全集は、1974年に、補巻：29巻が出され完成している。

II 採録対象

上記の荷風全集に所載の日記、随筆、手紙にしたためられている、荷風以外による著作、諸演芸の題目等、新聞・雑誌等の編纂物を、荷風の読書対象として採録した。これらの大半は、「荷風自身が実際に通読した」と確認できかねるが、すべて、彼の読書物として拾いあげた。

これら一切の著作について、確認できる範囲で著者名を付記した。また、著者(人物名)の登載はあるが、著作名が記されていず特定できないケースも少なくなかった。こうしたものにおいては、著作名抜きで、著者名のみを掲げた。

III 本表記載事項とその表示について

記載事項とその表示法は下記のようにした。なお、読書作品、荷風全集目次タイトルの項においては、直上行の記録と同じ記事について、「ㄱ」(同じ印)を用いて略記するものとしている。

1 年月日

各読書著作を所載する荷風の作品の年月日(その詳細は下記)を最初に表示した。この事項を最初に記録した理由は、年代的に読書物を把握することの便を考えたものである。日記類に所記の読書著作は日記の年月日によった。手紙類においてはその日付によった。上記以外においては、読書著作を所記している荷風の作品の初出の年月日によった。ただし脱稿の日付のあるもので、その日付が作品初出の年月日より2年間以上先立つものについては、脱稿の日付をもって上記の年月日とした。そうしたもののについては注をつけている。また、月名の表示については、荷風の記したとおりに示してある。したがって、例えば1月の場合、「1」と「正月」との二種の表記があることになる。

日付が確定できないものについては下記のようにした。

1) 月が確定できないものについて

季節がわかっているものは季節を記録した。ふた月の内のいずれかに確定できない場合、例えば8月と9月のどちらかを確定できない場合は、「8/9」というように表した。以外のケースでは、月に関して不明という意味で「一」と記載した。

2) 日が確定できないものについて

日が不明の場合は、日の記録に関して一律に「一」と記録した。

2 著者名

次いで各読書著作の著者を記した。荷風文中に著者の表示がない場合でも、できるだけ補って掲げることとした。著者の表示では、姓および名を記すこととし、補った部分はすべて〔 〕でかこんだ。なお配列の都合上、姓を前に名をあとに記す形を採った。つまり西洋人の場合、ファミリー・ネームを第一に記した。この点以外は転写を原則としている。したがって、今日のカタカナ表記法と異なる形の西洋人名の表記がある。また二種以上の姓名に分散した同一著者がある。いずれも、荷風が当該文中で表記した形で転記した。ただし後出の索引では統一が必要であり、本表でも索引との連携を考えて、各項目末尾に、今日の標準形と見られる形を〔 〕に入れて補記した。もっともそれらの差異が微妙に過ぎず、一目でわかるような場合はこの補記を省略している。とくに多出する「成嶋柳北」と「成島柳北」は荷風でもこの二様があり、本稿もそれに従っている。

3 著作名

続いて読書著作名を、荷風の文章から転記する形で記録した。転記であるから、外国綴りによるものは外国綴りで記載した。また原書（外国語）を読んだらしいが、著作名を日本語形で記している場合も、荷風が記した日本語形の著作名を記載した。更に略示形、不安定な（うろ覚えの）書名も、荷風の記したとおりに記録した。ただし著者名を冠した形で荷風が記している場合、文学辞典等で著作名から除くのを通例とするものに限り、著者名を外した形で著作名とした（書名から切り離れた著者名は著者の欄に記載される）。また、著者名が分かっているものの著作名が特定できない場合は、“成島柳北の日誌”のように、原則として、荷風の文を引用するかたちで示した。

4 典拠事項

典拠である「荷風全集」（岩波書店）本篇28巻、補巻（29巻）へのアドレスを記す。

1) 巻次、頁

「荷風全集」の巻、頁を記載する。次のように略示する。

第27巻7頁 → 27:7

2) 読書著作を所収する荷風の作品のタイトル

これには全集の編集者によるタイトル（編集タイトル）を含む。

例： 書簡

5 本表に対する注

当方で用いた時代的区分ごとの末尾（章末）に注を記している。これには、解説と荷風の文章からの抽出がある。後者は、「“ ”」引用符につつんで示したが、数字については洋数字を用いている。

Ⅳ 配 列

配列は、下記の順によって行なっている。

1 年月順

最初は、年月順に配列する。日は無関係とする。これは日が不明のものが多いためである。なお月不明のものはその年の最初に、月の代わりに季節を掲げたものはその季節の始まる月の項目群として、又ふた月にまたがるものは先の月に該当するものとしてそれぞれ記録した。なお、日については配列要素としていない。

2 著者順

次に読書著作の著者順に配列する。この中では、漢字・仮名にはじまるものを先に集め五十音順に配列し、ローマ字形によるものを後に集めABC順に配列した。

3 著作順

読書著作の著者名が同じものについては、読書著作名の五十音順（ローマ形によるものはABC順）に配列する。更に所収全集の巻、頁の順に配列した。

4 付 記

巻末に読書著作の著者の索引、雑誌・新聞名の索引を設けている。

第1章 明治期

あくなき好奇心

永井荷風は明治12（1879）年12月生まれである。早熟の読書人であった彼は、漢籍、江戸末期の人情本、英訳によるフランス自然主義文学などに、はやくから親しんでいた。数え年17歳の頃からは、当時の文壇の状況にもよく通じていた。

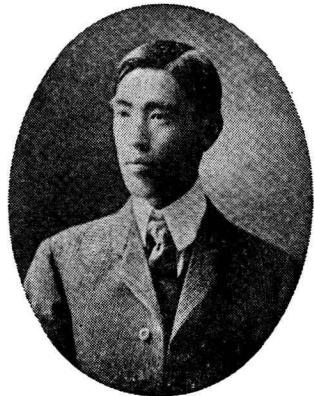
それはちょうど明治の文学が黄金期を迎える時期と重なる。明治20年代半ばより、レエール・モントフ、プーシキン、ドストエフスキー、トルストイなどのロシア文学が華々しく紹介され、それと重なってビクトル・ユゴー、アルフォンス・ドーデ、エミール・ゾラ、ギョ・ド・モーパッサンなどの思想が、わが国の文壇に活躍する人々に、欧州の思想の歴史の厚さ、複雑さを教える糸口をつくった。同時に時代の先端を担う思想への興味をも抱かせたのである。

明治30年、満17歳の秋上海に渡り、美と頹廢の街としてこの地をとらえた早熟の少年は、翌年の秋には処女作「簾の月」を懐に、牛込区矢来町に住む深刻小説の太御所広津柳浪を訪ね、弟子入りを乞う。

またその翌年、明治32年初冬、満19歳の彼は、清国人羅臥雲の紹介で巖谷小波の主催する木曜会に出席するようになり、やがてこの会の席上、ゾラを講じるまでになる。作家となつてのち人情漸の実作、実演を一貫してやることを望んだのも、ゾラを講じていた時代と重なる。

若き異才、永井壮吉（荷風）には作家になりたいという望みは強かった。しかし、それは何故かときかれれば、何よりも先ず人生の真実を掴みたいからであったとは、後年の荷風の言である。

こうした状況を考えると、荷風の読書遍歴については明治20年代の終わるか明治30年代の初めからみるのが望ましいが、この読書遍歴書誌は明治30年代半ばからはじまる。



在米中の荷風

明治35年

年・月・日	読書作品（著者・著作名）	巻・頁	荷風全集目次タイトル
35. 6. —	ゾラ 「L'Œuvre」 ¹⁾	18 : 260	ゾラ氏の「傑作」を読む
35. 7. —	〃 「ラベートユーメン」	18 : 266	ゾラ氏の作 La Bête Humaine
36. 9. —	ゾラ, エミール 「L'Amoureuse Comédie」 「La Confession de Claude」 「Les Contes à Ninon」	18 : 233	エミール・ゾラと其の小説
36. 9. —	〃 「Thérèse Raquin」 「Les Rougon-Macquart」	18 : 234	〃
36. 9. —	〃 「L'Assommoir」 ²⁾ 「Au Bonheur des Dames」 「La Conquête de Plassans」 「La Curée」 「La Faute de l'abbé Mouret」 「La Fortune des Rougons」 「Germinal」 「La Joie de Vivre」 「Nana」 「L'Œuvre」 「Une Page d'Amour」 「Pot-Bouilli」 「Son Excellence Eugène Rougon」 「La Terre」 「Le Ventre de Paris」	18 : 241	〃
36. 9. —	〃 「L'Argent」 「La Bête Humaine」 「La Débâcle」 「Le Docteur Pascal」 「Le Rêve」	18 : 242	〃
36. 9. —	〃 「Les Trois Villes」	18 : 244	〃
36. 9. —	〃 「Les Quatre Evangilles」	18 : 246	〃
36. 9. —	〃 ^{3,4)}	18 : 248	〃
36. 9. —	〃 「Madeleine Féral」 「Naïs Micoulin」	18 : 249	〃
36. 9. —	〃 「Le Capitaine Burle」 「Les Mystères de Marseille」 「Nouveaux Contes à Ninon」 「La Vœu d'une morte」	18 : 250	〃
42. 2. —	コッペイ [コペ]	27 : 7	雑草園其四：アカデミイの内容
42. 2. 25	ゴルキー [ゴーリキー]	27 : 20	〃 : レニエの詩と小説

年・月・日	読書作品(著者・著作名)	巻・頁	荷風全集目次タイトル
42. 2. 25	ゴンクール	27: 18	雑草園其四: レニエの詩と小説 ⁵⁾
42. 2. —	サルヅ [サルドウ]	27: 7	“ : アカデミイの内容
42. 2. —	シャトウブリアン	27: 7	“ : “
42. 2. —	ゾラ	27: 8	“ : “
42. 2. 25	“	27: 18	“ : レニエの詩と小説
42. 2. —	ドウデュ [ドーデ], アルフォン ス	27: 8	“ : アカデミイの内容
42. 2. —	ドーデ, レオン「レ, ドウ, エトランツ」 ⁶⁾	18: 526	仏蘭西現代の小説家 ⁷⁾
42. 2. —	フラビエール, レオン「田舎の女 教師」	18: 525	“
42. 2. —	フランス, アナトール「タイス」	18: 528	“
42. 2. —	ブルーゼー [ブルジェ], ポー ル	27: 7	雑草園其四: アカデミイの内容
42. 2. —	ブルヂェー [ブルジェ], ポ ール「コスモポリス」『門弟子 ^{ル・ダンツブル} 』	18: 530	仏蘭西現代の小説家
42. 2. —	ブレボ [プレヴォー], マルセル 「女の手紙」 ^{アイ・グイエルジュ} 「半処女」	18: 527	“
42. 2. —	フローベル	27: 8	雑草園其四: アカデミイの内容
42. 2. 25	“	27: 20	“ : “
42. 2. —	マルグリット, ポール「新しき 婦人」 ⁸⁾	18: 525 ~526	仏蘭西現代の小説家
42. 2. —	“ 「砂上の 足跡」「長延く日」	18: 526	“
42. 2. —	モーパッサン「イヴェット嬢」 ⁹⁾ 「人心 ^{ひとごころ} 」	18: 527	“
42. 2. —	モリエール	27: 8	雑草園其四: アカデミイの内容
42. 2. —	ユウゴー [ユゴー]	27: 7	“ : “
42. 2. —	ルメートル	27: 7	“ : “
42. 2. 25	レニエ「プレオー氏の会合」 ¹⁰⁾	27: 18	“ : レニエの詩と小説
42. 2. —	ロー, エドアール [ロッド, エド]	18: 531	仏蘭西現代の小説家